

ポラリスを仰ぐ北の大地から

新型コロナウイルス感染との 闘い：「旭川モデル」

旭川医科大学医師会 会長 古川 博之

旭川市で最初の新型コロナウイルス感染（以下コロナ感染）が確認されたのは、令和2年2月22日のことだった。私も病院長という立場から旭川医科大学病院に万全の体制を敷くべく、翌日には感染対策会議を招集し、25日には感染病床として13床を確保、26日には発熱外来をオープンさせた。

旭川市内では、旭川市医師会山下会長のお声がけもあり、保健所・医師会と5基幹病院（市立旭川病院、旭川医療センター、旭川赤十字病院、旭川厚生病院、旭川医科大学病院）が毎週のように会合を持ち、情報を共有しスムーズな感染対応に努めてきた。当初、旭川市の感染症用ベッドは市立旭川病院の6床しかなく、旭川市の第1例目以降、あっという間に5床が埋まるという危機的な状況となった。当院の感染症用の病床はICU 2床と一般病棟2床、計4床があるだけで、病床の不足が懸念され、病棟の個室9床を感染用に準備した。その後、旭川医療センターも10床から20床に病床数を増床、軽症・中等症は市立旭川病院、旭川医療センター、旭川厚生病院が担い、重症を旭川赤十字病院、旭川医科大学病院が受け入れ、旭川市が病床不足にならずに済んだ。当時、北見市ではクラスターが発生し北見赤十字病院だけでは重症患者に対応できないため、ECMO（人工肺）が必要な重症患者を旭川赤十字病院と当院で引き受けた。このような各病院の協力もあって、旭川市でのコロナ感染発症は27例（25人）（死亡ゼロ）に留まっている。

旭川市内の感染は4月17日以降一旦終息したように見えたが、7月21日以降は、陽性患者が散発的に出現するようになっており、予断を許さない。この間、PCR検査を全手術患者に拡充することを予定している病院や、冬に入るころにインフルエンザとともに再び増加すると思われるコロナ陽性患者や疑似患者のために、さらなる病床の増加を計画している病院もあり、小児や妊婦に対する対応も検討されている。このように、旭川市では、保健所・医師会と5基幹病院が情報を共有し、連携しながら感染対策を進めており「旭川モデル」と呼ばれる。



どうみん割とGo To トラベル

恵庭市医師会 会長 島田 道朗

最近の道医報を見返しますと、新型コロナウイルスに関する話題が溢れています。私も、札幌雪まつりの頃からゴールデンウィークにかけては、どのように対応するのが良いのかと難渋しておりました。幸い恵庭市では感染者数もさほど多くなく、発熱者が受診した場合は、おっかなびっくりPCRの検体を採取したりしていました。最近では唾液でも検査ができるようになり、外来診療での発熱者の扱いにめどが立ってきたのではと思っています。

医師会などの会議や行事が中止となり、暇な週末をダラダラと「Stay Home」していました。その矢先、観光業の壊滅的なダメージ救済のため、7月初めから道内宿泊施設の「どうみん割」、中旬からは「Go To トラベル」が始まり、ネットで検索すると、普段行けないような高級旅館やホテルに格安で宿泊できるとのことです。少々迷いましたが、『家族だけで・自家用車で・三密を避け・部屋食か、個室のレストランで食事をする』この条件で、思い切って週末旅行に繰り出しています。

支笏湖、定山渓など近場から始め、8月は美瑛・十勝へと足を伸ばしました。旭川経由で、ぜるぶの丘・マイルドセブンの丘・ケンとメリーの木・四季彩の丘・白金青い池など、今まで混んでいてスルーしていた所をじっくり観光し、部屋温泉付き高級旅館を満喫しました。翌日は、ガラガラのファーム富田で満開のラベンダーを堪能し、狩勝峠を越えて秘湯然別湖温泉で一泊しました。朝もやの中、然別湖の観光船の客は、私たちのほか二人だけでした。その後、糠平湖でタウシュベツ川橋梁（人少し、熊の気配？）、ナイタイ高原牧場レストハウスからの絶景を網膜に焼き付け帰路につきました。9月は、ニセコ神仙沼散策、銀婚湯温泉湯治を計画しております。

「人気のないところにコロナなし」私の「With コロナ」でした。